わたしの聖ジハード戦

女性が働くということ

連239載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

感染症のゆくえ

日本の結核患者数が減少し、「結核大国」の汚名を払拭しつつあるというニュースが流れた。

結核など、過去の病気というイメージがもしあるなら、それは大きな間違い。減少したといわれる現在でも、1年間の新規の患者数は1万人以上を占め、2000人近くが亡くなっている。つい先ごろまで、年間3万人近くの患者数と5000人あまりの死亡者があったことは、意外に知られていない。

結核の歴史は古い。鳥取県の青谷上寺地遺跡から、結核による脊椎カリエスに侵された人骨が発見されている。この遺跡は、弥生時代を中心とする集落遺跡で、5000以上の人骨のほか、当時の鉄器、銅鐸、青銅鏡、農具、漁具など多種多様な遺跡が発掘されている。

これをもって、日本には弥生時代に結核が大陸からもたらされ現代にいたる、という説が一般的になった。結核というと、肺結核を思い浮かべるが、結核菌が血行性に全身に散布されれば肺以外の臓器に病巣を作ることがある。椎骨に結核菌が侵入し菌が増殖すると、骨組織を破壊し、空洞が生じ、やがて椎体がつぶれて脊柱が屈曲し、脊椎カリエスとなる。症状が進むと脊柱の一部が丸く曲がり、耐えがたい痛みを生じる。遺跡に残る人骨も大きく湾曲しており、見るたびに遠い古代の人の苦しみが伝わってくるかのようだ。

以来、結核は静かに深く私たちの生活に入り込み、免疫力の弱った体を攻撃してきた。特に明治期から戦後の混乱期に流行し、多くの若い命を奪った。脊椎カリエスといえば、正岡子規を思い浮かべる。子規は本名を升（のぼる）というが、口の中が赤く、血を吐いて鳴くようにみえるほととぎす（子規、あるいは不如帰などとも書く）に自らを重ね、子規と名乗るようになった。病んで尚、執筆や俳句づくりに励み、その闘病の様子は随筆「病牀六尺」や「仰臥漫録」に詳しく描かれている。

予防接種（ワクチン）や抗菌薬の普及などで患者は減少したが、結核菌の恐ろしさはそのしつこさにある。若い頃に感染し、体内に長年潜伏していた結核菌が免疫力の低下する高齢になって再び猛威を振るうことがままあるためだ。専門医が不足していることも大きい。さらに、抗菌薬が効きにくく、近年では海外からの渡航者が感染しそのまま日本で暮らすことで感染が広がる傾向がある。しかし、多角的な対策が功を奏したのと、3年間のコロナ禍で生活全般が感染対策を帯びたことから、先進諸国のなかではずば抜けて患者・死亡者の多かったのが、ここに来てようやく他の諸国並みになった、というわけである。

結核だけが敵ではない。江戸から明治にかけては、幕末に長崎に上陸したコレラをはじめ、平安時代からあった痘瘡、腸チフスやはしかなど、複数の感染症が人々を襲った。特にコレラは周期的な流行をきたし、時に年間15万人以上の感染者を記録した。

ワクチンが、永久的な効果をもつわけではないことは、すでにコロナワクチンで嫌というほど思い知らされた。抗菌薬も万能ではない。薬に頼り過ぎず、感染症と上手に共生する道の模索は、おそらく人類が生きている限り続く。

減少のニュースは喜ばしいが、油断はできない。その歴史を振り返り、菌の視点でみたときは、今はほんのひと休み、そうほくそ笑んでいるのを感じずにはいられない。

イラスト・伊藤香澄